

## 平成 28 年度 第 3 回北関東救急看護研究会

### 発表概要

テーマ：救命救急センターにおける呼吸ケアの課題と対策

－人工呼吸器使用の実態調査から－

話題提供者

所属：獨協医科大学病院 救命救急センター

氏名：中田 哲也

### はじめに

救命救急センターでは、人工呼吸器からの早期離脱を目標に、呼吸状態のアセスメント・吸引・体位ドレナージ等の呼吸ケアを行っている。しかし、人工呼吸器離脱困難な患者や離脱後に再度人工呼吸器管理が必要となる患者がいる。人工呼吸器管理期間の長期化は、呼吸筋を含む筋力の低下や人工呼吸器関連性肺炎の原因となり、入院期間の長期化につながると言われている。A 病院にも呼吸ケアチーム（以下 RST とする）があるが、人工呼吸器の管理状況や RST の効果について調査したことはなく、RST の活動内容を見直す必要がある。

### 目的

A 病院救命救急センターの「人工呼吸器使用状況」「呼吸に関する看護計画立案状況」「呼吸筋を含むリハビリテーション依頼（以下 RH とする）状況」を調査し、課題を見出す。

### 研究方法

2014 年 10 月 1 日～2015 年 9 月 30 日に救命救急センターに入院した患者うち、人工呼吸器を使用した患者を抽出し、「人工呼吸器使用状況」「呼吸に関する看護計画立案状況」「RH 依頼状況」について診療記録から後向きにデータをクロス集計し、分析する。

### 倫理的配慮

A 大学病院生命倫理委員会の承認を得た。

### 結果

期間中に入院した患者の人数は 1117 人で、人工呼吸器使用者数は 220 人であった。人工呼吸器使用患者の 20.6% で呼吸に関する看護計画を立案していた。人工呼吸器使用患者の 23.6% で RH 依頼があった。

### 考察

呼吸に関する看護計画立案は、人工呼吸器管理患者の 20.6% と少なかった。救命救急センターでは、患者への直接的な援助に要する時間を確保するために、入院後は簡略化した記録を用い、看護計画を立案していない。その後 NANDA 看護診断を含む看護記録へ変更しており、看護計画が立案されていない期間が生じ、これが呼吸に関する看護計画の立案が少ない原因となっている。今後は呼吸ケアの実施状況を調査していく必要がある。

RH 依頼は、人工呼吸器使用患者の 23.6% と少なかった。リハビリテーション実施による全身状態への影響を懸念して、人工呼吸器使用期間中に RH 依頼が少なくなったと考える。熊丸は、「心血管作動薬投与中の患者に関して血行動態が安定しており、かつ酸素需要の増大に対する予備力があるならば、早期リハビリテーションの開始を検討すべき」と述べ、RST で共同し RH 開始基準の見直しを行う必要がある。

第 67 回救急医学会関東地方会で発表した内容である。